

序論)

いよいよ、イザヤ書も最後の箇所となりました。聖書全体がヨハネの黙示録で、この世の終わりの出来事が語られて終わるように、イザヤ書も【主】の民に対する神様の最終的な計画を語ることによって終わります。

【主】の計画を知るということは大切です。なぜなら、【主】の計画を知ることによって、私達が【主】の計画のどこに置かれているかを知ることができ、私達がこれから何をしたらいいのかを知ることができるからです。また、【主】の計画を知ることによって私達にはどんな将来が約束されているかを知って希望を持つことができます。

だからこそ、私達は今日の箇所を通して、【主】の計画を知り、私達の現在位置と、私達がすべきこと、そして、私達の希望を確認していきたいと思います。

1) 【主】の民を集めるために宣教させる【主】

まずは 18 節を読みましょう。

66:18 「わたしは彼らのわざと意思を知っている。わたしはすべての国々と種族を集めに来る。彼らは来て、わたしの栄光を見る。

今日の箇所は、わかるようで、わかりにくいところがあるので丁寧に見ていきたいと思います。まずは「わたしは彼らのわざと意思を知っている」という部分です。私達はこのイザヤ書 66 章を通して、イスラエルが形式だけの礼拝をして、実際には偶像礼拝をしていたり、御心に合わない礼拝をしていたのを見てきました。【主】はそんな偽善的な礼拝者たちの行いと心を知っておられたのです。

それで【主】が建てられた計画は何かというと、イスラエルだけじゃなくってすべての国々と種族を、神の民として集める。という計画です。そして、世界中の民が【主】のところに集まって、【主】の栄光を見るようにする。という計画です。

元々は、イスラエルこそが、【主】の祭司となって、世界中の人々に【主】の祝福を広めるという使命を持っていたのですが、その肝心のイスラエルが形だけの礼拝をするけども、実際には【主】に逆らう歩みをするようになってしまったのです。だからこそ、神様は世界中から【主】の民を呼び集め、イスラエルにこれこそが【主】の民だということを見せるようにされる。ということです。

では、どうやって世界中から【主】の民を集めるのかというと、19 節

66:19 わたしは彼らの中にしるしを置き、彼らのうちの逃れた者たちを諸国に遣わす。すなわち、タルシシュ、プル、弓を引く者ルデ、トバル、ヤワン、そして、わたしのうわさを聞いたことも、わたしの栄光を見たこともない遠い島々に。彼らはわたしの栄光を諸国の民に告げ知らせる。

神様は、人々の中にしるしを起し、【主】のさばきから逃れた者たち、つまり救われた者たちを世界中に遣わせして、そこから【主】の民を呼び集められるのです。

問題は、この「しるし」とは何かということです。イザヤ書では、このしるしが何かは明確に書かれていませんが、聖書全体に書かれている神様の救いの歴史から理解するのならば、この「しるし」とは【主】イエス・キリストのことであり、聖霊様のことだと理解することが出来ると思います。実際、みなさん、【主】イエス・キリストによって救われた人たちが世界宣教をするようになったのはいつですか？ そう、聖霊様が与えられたペンテコステのときですね。キリストによって救われた人たちは、キリストという救い主の名を持つようになりました。そして、そのキリストを宣べ伝えるために与えられたのが聖霊様だったのです。

最初はペテロたちユダヤ人宣教師が世界中に福音を伝え、そして、その福音によって救われていった異邦人宣教師たちが、さらに世界中に福音を伝えていきました。だから、イスラエルから見るならば世界の果ての果てである。私達の国、日本にも福音が伝えられたわけです。

2) 【主】の民を礼拝者にされる【主】

でも、神様の計画は世界中に福音が伝えられる世界宣教だけでは終わりません。今度は20節を読みましょう。

66:20 彼らはすべての国々から、あなたがたの同胞をみな【主】への贈り物として、馬、車、輿、らば、らくだに^{こし}乗せて、わたしの聖なる山エルサレムに連れて来る——【主】は言われる——。それはちょうど、イスラエルの子らが穀物のささげ物をきよい器に入れて、【主】の宮に携えて来るのと同じである。

【主】の栄光と福音が世界中に広がった後どうなるかということ、その世界宣教をした人たちが、「あなたがたの同胞」つまり、イスラエルの同胞を【主】への贈り物としてエルサレムにつれてくるのです。

ここでいう同胞というのは、イスラエル人、ユダヤ人のことを指すと理解することもできますが、もっと広く、キリストによって救われたすべての【主】の民たちと理解してもいいと思います。

みなさん、旧約時代においては礼拝というのは、羊とか牛とか、穀物とか、そういう物を【主】に献げることが礼拝でしたが、神様の計画の中の最終的な礼拝というのは、【主】の民自身を神様に献げる。それは最終的な礼拝のあり方なのです。だから、ローマ人への手紙 12 章 1 節にはこうありますね。

ローマ 12:1b あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。

【主】の民としての自分自身を【主】に献げるために【主】のところへ持って行く。そして、【主】から離れてしまった世界中の人々や、イスラエルの人々をもう一度、【主】にある同胞として【主】の元へ連れて行く。そのような礼拝を献げることが今の私達に求められているのです。だから、【主】は 21 節のように言われています。

66:21 わたしは彼らの中からも、ある者を選んで祭司とし、レビ人とする——
【主】は言われる。

元々祭司は、アロンの子孫じゃなければいけないし、レビ人もイスラエル人の中のレビ部族の人たちでなければいけませんでしたが、でも、神様の計画としては世界宣教がされた後、【主】の民が【主】への捧げ物として連れて来られたならば、その人たちの中から、改めて祭司とレビ人を任命するというのです。

つまりこれは、選民イスラエルだけではなくって、すべての民が、【主】を礼拝する祭司となり、【主】に仕えるレビ人になれるということです。つまり、神様のご計画としては、イスラエルとそれ以外の救われた人たちとの間の垣根はなくなるのです。

私達は、この【主】の計画の中で、今、このように【主】を礼拝することができるのです。

3) 永遠に【主】を礼拝する世界

そして、【主】は、【主】を礼拝する世界を新しく造り、その世界は永遠に続くと言われます。22 節と 23 節を読みましょう。まずは 22 節から

66:22 わたしが造る新しい天と新しい地が、わたしの前にいつまでも続くのと同じように、——【主】のことば——あなたがたの子孫とあなたがたの名もいつまでも続く。

イザヤ書の 65 章でも【主】が「新しい天と新しい地」をお造りになると語られていました。その時の「新しい天と新しい地」は、もはやそこには泣き声も叫び声もなく、【主】にある喜びと平安があるということが強調して語られていました。

それに対してこの 66 章で語られる「新しい天と新しい地」というのは、【主】への礼拝が永遠に続く世界として語られています。23 節も読みましょう。

66:23 新月の祭りごとに、安息日ごとに、すべての肉なる者がわたしの前に来て礼拝する。——【主】は言われる——

21 節の時点で、イスラエルと異邦人の垣根は取り外されていますから、異邦人、イスラエル関係なく、すべての肉なる者が【主】を永遠に礼拝する。それが【主】が造られる新しい世界、新天新地なのです。

だから、私達が行っているこの地上の礼拝は、【主】が用意される新天新地における礼拝の予行演習といえますか、前段階なのです。だから、私達が礼拝を喜んでささげることができるというのは、後の世界に続く、とっても大切なことなのです。

なぜならば、【主】は最終的に私達を永遠の礼拝者にされるからです。

4) 偽善的な礼拝者の末路

ただ、例え 23 節で「すべての肉なる者」といわれたとしても、すべての人が無条件で、新天新地における礼拝者にされるわけではありません。24 節

66:24 彼らは出て行って、わたしに背いた者たちの屍を見る。そのうじ虫は死なず、その火も消えず、それはすべての肉なる者の嫌悪の的となる。」

ここには今までイザヤ書で語られてきたイスラエルのように、【主】の恵みを受けながらも、形だけの礼拝。偽ものの礼拝を献げて【主】に背いてきた人たち、【主】からの福音を聞きながらも、それでも【主】に逆らうことを選んだ人たちの末路が書かれています。その人はどうなるのでしょうか。彼らは【主】の前で死んだ

者とされ、その死体を蝕むうじは死なず、彼らを焼く火も消えない。と言われて
います。これは簡単に言えば、地獄の苦しみが永遠にあるということです。

【主】の栄光が世界中に広げられているのに、それでもなお、【主】に逆らいつ
づける人たちは、永遠の苦しみをうける者となり、【主】の民にとって嫌悪の的と
なるのです。

私はこのみことばを通して、「だから、お前たち、そのような悲惨な結末を迎え
るようにはなるな！」という【主】の語りかけを聞いたような気がします。

結論)

みなさん、今日の箇所ですら【主】のご計画とは何でしょうか？

神様の最終的な計画は、世界中の人々を集めて、【主】の栄光を見させる。とい
う計画です。

そのために【主】は、イエス・キリストを地上に送り、聖霊様によって世界宣教
をさせ、世界中に【主】の栄光を語らせました。私達は今、この【主】による世界
宣教がされている最中さなかにいます。

そして、【主】は、救われた私達に何をさせたいかということ、【主】による同胞を
【主】への捧げ物として、【主】の元に連れていくということです。

そのためにまずは、私達自身を【主】に喜ばれる聖い生きた供え物として【主】
に献げることが大切です。また、【主】が救おうと定めておられる隣人や、イスラ
エルの人たちを、【主】の元へ連れていくのです。

そして、最終的に私達に与えられる世界は、もはやイスラエル人、異邦人関係な
く、【主】によって救われたすべてのものが【主】を礼拝し、永遠に【主】を礼拝
し続ける世界です。そこは65章で語られていたようにもはや悲しみ、叫びもな
く、ただただ【主】による喜びが溢れているのです。

そして、同時にこの【主】のみことばを受け入れず、【主】による礼拝者になる
ことを拒んだ人たちがどうなるかということ、永遠の死、永遠の苦しみを受けるこ
とになるのです。

みなさん、だから、形だけの礼拝者ではなくって本当の意味での礼拝者になりま
しょう。実際的に【主】のみことばに従い、【主】の栄光を世界中に語り告げ、救
われるべき【主】の民を【主】の身許へつれていき、ともに【主】を礼拝するもの

となりましょう。

みなさんは【主】に救われた者です。救われたならば、【主】への献身者なのです。【主】に自分を献げる者なのです。どうか、この日曜日の礼拝だけで終わるのではなく、自分のすべての人生を通して、自分自身を【主】へ献げていく、そのような者になっていきましょう。

それがイザヤ書を通して、【主】が私達に求めておられることではないでしょうか。